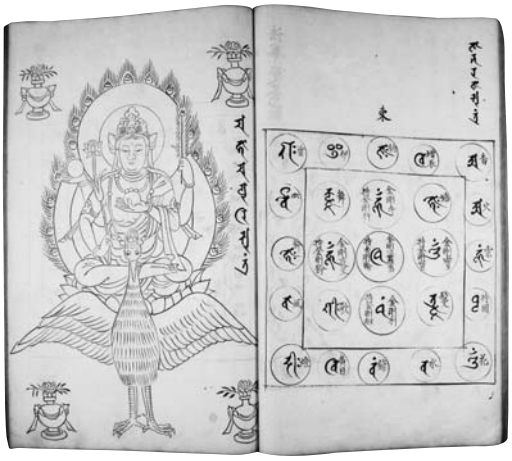
町史とっておきの話 185

楢戸龍蔵院の修法書と切紙・巻物

東洋大学講師
久野俊彦



『諸尊三秘密』
（享保５年写）

修法書の伝授

真言・天台宗の密教寺院の僧侶や修験道の法印は、人々の願いに応じてさまざまな祈禱を行います。それを修法といい、そのやり方を記した書物が修法書です。楢戸の修験龍蔵院には、42点の修法書類が残されていました。師僧から弟子僧へと直接伝授された次第（祈禱順序）と口伝（内容）を忠実に守りながら行ずる祈禱が修法です。修法書は、師僧から弟子僧に書写を許された秘伝の書物でした。その奥書には、師匠から弟子への伝授のありさまが記されています。

その例をあげると、龍蔵院本の『十八道糸玉抄』は、宝暦7年（1775）に伊南古町（南会津町）の円成院（田中坊）泰阿が書写したものです。泰阿が書写したもと本は、慶安3年（1650）に会津（若松か）の甚性房慶弁が書写した本でした。さらに慶弁が書写したもと本は、元亀2年（1571）に薬王寺（いわき市四倉町薬王寺）の純瑜が著したものでした。純瑜は馬目（いわき市）の出身で、紀伊根来寺・高野山・京都醍醐寺で学んだ学僧です。奥州で著された密教の書物が、この地で伝授と書写が繰り返されて現在に残っているのです。

また、『水天供之次第』は、もともとは応永5年（1396）に高野山宝性院の宥快が書写したものです。これも書写が繰り返され、龍蔵院本は、延享2年（1745）に、円成院の貞珉の子、多門が17歳の時に書写したものです。多門は、同じ年に諸国の神社仏閣を記した『諸国藻塩草』という大部な書物を書写しています。とても学問好きの青年ですが、若くして亡くなったらしく、父が追悼の歌を『水天供之次第』に記しています。

『諸尊三秘密』は曼陀羅に画く仏像の図像集ですが、龍蔵院本は、享保5年（1720）に尭弁が書写して覚範が保持し、遺弟長願が護持したものです。尭弁が書写したもと本は、霊雲寺（江戸湯島）の学僧浄厳が所持していた本を宥受が貞享4年（1687）に写したものでした。ところが、龍蔵院本の「長願」の名は墨で塗られて消されているのです。龍蔵院の法印が、この本を所持するにあたって、もとの所有者の名を消したものです。これは、正式な伝授でなく書物を手に入れたことを示しています。

切紙の伝授

密教や修験道では、師から弟子への伝授の際には、半紙大以下の小さめの紙に、伝授の内容を要約して記して弟子に授けました。これを切紙といいます。龍蔵院には47通の切紙が残されています。切紙の冒頭は、「稲荷社大事」「仁王経大事」などと、「○○の大事」と書かれています。切紙の奥書には、「寛政6年（1794）寅十月吉日　法印祐誉示之　法印行鶴」などと記されています。行鶴は龍蔵院の法印です。切紙を伝授するときは、年号と師僧、弟子僧の名が記されました。切紙は半紙を横半分に折って横長にして書いたものです。切紙の内容は、祈禱・呪術などの技術的な方面の作法や知識でした。その作法や知識の伝授の修了証が切紙でした。

修験の切紙から職人巻物へ

奥会津地方に多く存在する「職人巻物」の冒頭には「○○の大事」と書かれているものが多くあります。半紙に書かれた切紙を横半分にして、横長に切って横につなぐと、横長の切紙になります。その冒頭には「屋根葺之大事」と書かれ、その奥書には、師匠から弟子への名と年号が記されていたとします。こう考えると、職人巻物の伝授が修験道の切紙の伝授と同じだったことがわかります。龍蔵院には、10通の職人巻物が残されており、修験の法印が巻物作りに関与していたことが推測されます。